

〈近世女性史資料(13)〉

教訓
媿方 女今川姫小松 (1)

— 書誌・翻刻 —

黄 色 瑞 華*1
若 林 俊 英*2

<Early Modern Women's History Research Materials (13)>
ONNNAIMAGAWAHIMEKOMATSU
—Text and Bibliography—

……………OHSHIKI Zuike &
WAKABAYASHI Toshihide

-
- * 1 城西大学客員教授・主任研究員
 - * 2 城西大学准教授・語学教育センター

一書誌

所蔵 城西大学国際文化研究所

書型 半紙本一冊。縦二五・五センチ。横一八センチ。

表紙 厚紙の上に縹色無地極薄紙を貼る。ただし、湮滅甚

だし。

題簽 左肩。白紙四周枠。縦二〇・五センチ。横三・八センチ。

教訓 嬖方 女今川姫小松 全

綴糸 茶色絹糸一本掛。

内題 なし。

丁数 全六十丁。ただし二丁と三丁は落丁。

各面 不揃。

匡郭 縦十八・三センチ。横十二・二センチ。

柱刻 口ノ一と口ノ十一（口ノ二と三落丁）。

本文、十一と十九。二十と五十一と六十九。七十二

ノ百一と百二十一。

奥付 文化十四丁八月吉日

書林 江戸 日本橋通吉町目

須原屋茂兵衛

大坂 心齋橋通北二町目

(以下湮滅)

二 翻刻

凡例

1 『教訓 嬖方 女今川姫小松』の忠実な翻刻を旨とする。

2 使用漢字は可能なかぎり原形のままとし、原本の面影

を伝えるように配慮する。

3 漢字ルビはすべて原本のままとする。

4 行移りもすべて原本のままとし、丁移り、表裏の別は、『

一オ・』一ウを以って示す。



年中故実并五節句由来

正月この月をむつきといふた

かきいやしきゆきくるがゆへにむつ

ひ月といふをりやくしていふなり

△元三とはとしのはじめ月の初

日のはじめなればいふなり

△若水もんどつかさより立春

の朝くみてたてまつるなり

年中のしや気をのぞくとなり

△とそさけハさがてんわうの御とき

よりはじまるこれもねんぢうの

しつゑきをはらふ寿なり

△○○○といふても○ひかために

むかふたゞし人ハはぎもつて命も

するゆへにはといふもんじを

〈以下落丁〉

「口ノ一ウ」



口1オ

諸芸手業教草

夫人はいきとし生る物の中に

たふときものなればよろづの

智をそなへたりされバその

智と智をくらぶるに長くも

ミぢかくもあつくもうすくも

あれども皆いたじきの上より足

のあなうら迄其一分のらちを

あけずと言事なしかゝるめで

たき人の智なれば多きも少き

もよろづにわたりて悪く用ゆ

れバ悪と成よく用ゆれハ善と

なるたとへバ雨露ハあめつゆ

ながらふりて国土のわづらひ

となるもあり又は国土のた

「口ノ四オ」



口4オ

すけとなるもありされバ女ハ
陰にして内をまもるが天然
のそなふるところなれバ智
も内にして出さずもろく
のげいのう哥学手ならひ琴
すごろく歌がるた貝あハせに
いたるまで内にははげミたし
なミておもてに常にあらハ
さずしてはれのために心
がけ子をそだつるにつきても
親をなぐさむるに付ても或ハ
人をつかふにも人につかハるゝ
にもかならず其徳をあらハし
ふかくたしなむものとしる
べき事なり惣じて男
女にかぎらず人の身のうへ
にはげいといふ事とわざといふ
事ありもとハ芸もわざも業
もげいなれどわかちていふ時ハ
上にかくところの琴三味せ
んは芸なり爰にあらハす
たちぬいハわざなりたとへば

雲の上人より下はしづの
女にいたるまで女にそなわ
りたる手業はたちぬいう
みつむぎ糸ひき機をり衣
あらひなどいづれも衣服の
用なり飯をかしき酢さけ
をとゝのへ汁菜をりやう
りするまで皆いんしよくを
おさむる用なりこれにい
やしきわざなりと思へる
はもつての外のあやまり也
おろかなる人ハ下さまのわざと
てしらぬを手がらのやうに
思ふなりたとへバ日月の国
土をてらしたまふもきミの
民をおさめたまふもそのへ
だてなき事を見るべし
下さまなる手わざをせぬハ
富貴のなすところなりしら
ぬはあほうのなすところ
なりたとへ身のうへおもき人
たりとも其ミちくをよく

わきまへしりて召つかひの
人までもよく／＼申付るこ
そ是ならざらんやまことに
わきまへしるべき事なり

(図、略)

産前産後心得之事

源氏物がたりにとはづかしとお
もひ玉へりつる腰のしるしと書

り是婦人の懐妊にはらおび

する事なり我國のはらおび

の始りハ神功皇后三韓を征した

まふ時よりはじまりしとなり

産前さんごハ養生第一のもの

にて食物万事に心を付大切に

すべしなを産家養草といふ

本あり求めて見るべし此書ハ

産前産後養生心得の事を

かな書にしてふ人の見やす

きやうに書たる本なりさて

食物のあらましを此次に

出すよく／＼心得あるべし

(図、略)

産前よき食物

くらげ かき こい がん いか せり ぶ

にんじん 山のいも ごぼう うど

あざミ いちご くこ あハ きび

大麦 黒まめ 大こん

同あしき食物

あぶらあげ からき物 あつきもの

川うを くさきもの すべりひゆ こんぶ

にくじきうろこなきうを どじやう

なまず たこ 魚び いしがれ すし

あゆ しゞミ がぎミ もち くさびら

くずのこ ひともじ めんるい すも、

あんず くわい なし 鳥るい

産後あしき食物

わらび たで ふか なすび そば

にんにく いも こんにやく さんせう

こせう ちさ あつきさけ こんぶ

きのこ くだもの めんるい

(図、略)

さんごのいミもの

わきがの人 男女のまじハりを忌

せいきをつくさずおどろき恐るゝ事

早くかミとかす はやくぎやうすいせず
はやくつめ切らず 手足をひやさず

同よきしよくもつ

こひ かき くらげ とびうを

ひともしの白ミ かゆ

ちゝのたらぬによき食物

こひ とびうを するめ 白かゆ あまざけ

麦 小豆 山の芋 ちさ たんぼ、きりのは

産後 忌令

月水のけがれ七日はゝかるへし

産のけがれ七日母卅五日同火の人ハ

二夜三日をへたて、神へ参るべし

ながれざん三月まで八月水に同じ

四月五月に及バ、父ハ五日母ハ十日

神にはゝかるべし

王昭君は漢の元帝の后也戎国

よりみかどをせめけるに后を送り

給ハんと三子人の絵図と画しめ玉ふ

に絵師王昭君かまいないなきをい

きどふりわろく写して奉りけれバ

王昭君を戎国へ送らせ玉ふになく

く趣きけるとなり

見るたびに鏡の影のつらきかな
かゝらざりせばかゝらまじやハ

(図、略)

楊貴妃は玄宗皇帝の后にして

天下の美人なり帝てうあひ限

なくあまりにふかくめでたまひ

て朝まつりごとをもおこたり玉へ

バ国のミだれとならん事を臣

下なげきてつるに楊貴妃を

殺しぬとかや惣じて色に深く

おぼるゝ者はかならずほろぶ

つゝしむべきの第一なり

(図、略)

李夫人は漢の武帝の后也てう

あいなゝめならずありしに病にうせ

給ひしに帝かなしみにたへて反魂

香を焼せたまふに形ちけふりの

内にあらはれしに手にも遣られず

せんかたなく絵に写させ御覽する

に物いはずしていとゞおもひにしづ

ミて物ぐるハしく成給ふとなり

ものいハぬなげきをさらに焼そへて

けふりの中の俤はうし

(図、略) 「ロノ十オ」

春 太上天皇

初音とハ おもハ ざら なん 一とせを

二たび来る 春の うぐひす

夏 定家

玉鉾の こち行 人の ことつても

たえて ほどふる 皇月雨 のそら 「ロノ十ウ」

秋 為家

いつも ふく 同じ とき はの 松風は

いかなる 音に あきを しるらん

冬 貫之

ふゆ ごもり 思ひ かけ ぬを 木の間 より

花と見る まて ゆきが ふりける 「ロノ十一オ」

百人一首ハ京極中納言小倉山庄の

障子の色紙形に書置給ふ始の名

ハ光季後に定家卿と申侍る敷嶋

の道に長じ給ひ尚其淵源を極めん

とて住吉明神に参籠し丹誠抽で

祈り給ふに汝月明か也とあらたに

霊夢を蒙らせ給ひ其後いよく

此道の誉を世に広め今の世迄も

此卿の勲功のおよぶ所かぞふるに

いとまあらず明月記をしるし源氏

伊勢物語古今集の魯魚の誤り

百人一首の文字遣ひ等をたゞし

給ふ実に敬ひ尊ふべきミちな

らずや

しきしまの道をきハめてうへぞなき

あをがざらめや定家の風 「ロノ十一ウ」

名所六之川

御裳濯川 伊勢

なつの夜も 涼しかり けり 神風や

ミもすそ川に すめる月かげ

音羽川 山城

をとハ川 山にや春の こえつらん

せきいれて おとす 雪の下水 「ロノ十六オ」

芳野川 大和

よしの川 あさき瀬も なく ゆく水の

人の心の うへハ つれなき

名取川 陸奥

おろかなる 涙ぞ あだに 名とり川

あら ハれ ぬ とも せきあへ ぬ ぞで 「ロノ十六ウ」

大井川 山城

大井川 御ゆき ふりにし色 ながら

入江の まつに なつは きにけり

角田川 武蔵

こよひまた たれ宿 からん いほさきの

すみだ 河原の 秋の 月かけ

名所六之山

三輪山 大和

水の色に なきおり しかぬかざし かな

ミわのひばらの 春の夕ぐれ

大江山 丹波

おほえ山 しげミが かとう ましりても

人にしらるゝ 蛭なり けり

宇津山 駿河

するがなる うつの山辺に ちる花よ

ゆめの中にも たれをし めとて

小塩山 山城

をしほ山 松の葉とづる 夕しにも

いろこそ なけれ 峯の こがらし

佐夜中山 遠江

さゝの葉は さやの中山 吹風に

おのれ 寝ぬよの ゆめも むすはず

筑波山 常陸

つくば山 しげき まさきの かずよりも

しらぬは 人の こゝろ なりけり

当流しつけ方

人は老たるも若きも

立にも居るにもこと

くく礼法あるもの

大かいは先主人と云へ

と親と子を若きと

年寄と貴きといや

しきと〇〇の位を

ミたさぬ事〇〇〇に

つけても一身のごと

く所すべて礼にあら

ずといふ事なし常に

飲食の口にある如く

衣装の身にあるごと

くはなれざるもの

にして〇〇〇心を

つけ師〇〇〇人

にたづねて〇〇へきこ

となりたとへハ給仕きうじ

人といふハ上つかたに「ロノ九オ下段

ある事なれ〇〇ゞかり

て下くにてハ〇ひ

といふ此義上をおそ

れはゞかりて給仕と

いはぬか礼なり膳に

すハる時は下の人は

あいさつありて扱飯

をくふにハマづ右の

手にてふたをとり

左へうつし左りの方

おき汁わんのふたも

同じく右にて取左

の手にてひたりにをき

さて箸を取あげて

持ながら飯椀をとり

あげひたりへうつし

て喰ふべし汁菜

のわんも其ごとく

右にて取て左りの

手へうつすべし「ロノ九ウ下段

下におくときハもと

のごとく右の手にて

下に置なりはじめ

は汁ハかりすいて

実をくハず二度めに

ミをくふ是より左り

の手にて下におく

べし菜は膳に

つきたる菜より

くふべしさいより

菜へわたるべからず

汁より二の汁へうつ

るべからずいくたび

にても飯へかへるべし

箸のさきをもつハ

慮外なり又〇

人のまへとて〇あ

まりミぢかく持ハ

見ぐるし香の物は

湯のさいなれども

女中ハくハぬもよし

めんるいは口をとの「ロノ十オ下段

するものなればずい
ぶんとどきゝぬやう
にくふべし又そば如く
汁をうけてくふハ大
俗のわざなり女ハ
かならずすべからず
まんぢうハ両手にて
おしわりあんのこぼ
れぬやうにおしあハせ
て二ツにわけ右の方を
下におき左の方より
くふべし餅又は
菓子くだものにて
にても丸きものハ
一口にくひ切べからず
わきを少しくひきり
てミかづきなりに
ならぬやうにくふべし
吸物は汁をすいて
ミをくふべし二こんめ
三こんめのすいものハ
ミをくひて汁を吸

「ロノ十下段」

べし盃ハうけたる
酒をのミほし
のこしたるをしたに
ていたゞき臺にすへ
てさすべし臺より
下にをく事ハすま
じきなりいたゞき
やうハ右の手にさか
づきひだりに臺を
とりて中にてとり
わけ臺を〇〇取
べしさかな〇〇〇き
て紙にのせをく
べし其外茶の
湯は師を求めと
くと伝授をうくべし
今川になぞら
へて自をい
ましむ制詞の
条々
一常の心さし
かたまじく女

「ロノ十一下段」

本文十一オ

のみちならか

ならざる事

一わかき女無

益の宮寺へ「本文十一ウ

参りたのし

む事

一少きあやまち「すじ

とて不改敗あらためすべ

れに至りて「本文十二オ

人を恨る事うらむ

一大事をも辨わま

なくうちとけ

人にかたる事

一父母の深き「本文十二ウ

恩をわすれおん

孝のみち疎おろか

なる事

一夫をかるしおつ

めわれを立て「本文十三オ

天道を恐ざる事てんたう

一道に背ても「みち

栄ゆることを「さか

うらやミね

がふ事「本文十三ウ

一正直にして「しやうぢき

衰たる人を「まろへ

かろしむる事

一遊びに長じ「あそ

或は座頭を「あまひ

集め或は見「あつ

物をすき好事「もの

一短慮にして「たんりよ

しつとのこゝろ

ふかく人の「本文十四ウ

嘲を不恥事「あざけり

一女の猿利根に「さるりこん

迷ひ万事に「まよ

つき人を譏事「そと

一人の中言を「本文十五オ

企ひとの愁を「くわだ

もつて身を

楽しむ事「たの

一衣類道具己「いるいだうぐおのれ

美麗を尽し「本文十五ウ

召つかひ見苦事めし みるくし
一 貴と賤の法たかき いたつき ほう
ある事を不辨あること ぶんべん
気随を好事きずい ことば
一人の非をあげひとり のち を あげ
我に智ありとわれ ち あり と
おもふ事おもふこと
一 出家沙門に對しゆつげしやもん たい
面すといふともめん す と い ふ と も
側近くなるゝ事そばちか なる こと
一 我分際を不わがぶんざい を 不
知或は驕或ハしらずあるひ せりあるひ
不足の事ふそく の こと
一 下人の善悪をげにん ぜんあく を
辨へす召つかひわま へ す めし つかひ
やう正しからやう たい し から
ざる事ざること
一 舅姑にそまつきゆうこ に そまつ
にして人の譏しつとじしやうめ
をえる事を える こと
一 継子に疎にけいし ちよぞか に
して他人の嘲まごこ たにん あざけり

を不恥事を ばらばら
一 男たるにハ仮おとこ たる に は かり
間近き親類まぢか しんるい
たりとも親しあいだ した
みを過す事み を すこ
一 道を守る人をみち を まも る ひと を
嫌ひ我に諂ふきら われ へつらふ
友を愛する事とも を あひ する こと
一人来るときひとり きた る とき
わが不機嫌にわが ふきげん に
任せいかりをうまか せ い かり を う
つし不礼の事つし ふれい の こと
右此條々常にみぎこのでうくつね に
心にかけるこころ に かけ る
ゝべき事珍らしゝ べき こと めづ ら し
からずといへどもから ず と い へ ど も
なを以て慎しむな を もつ て ちん し む
べきことなりべき こと なり
先家を守るべまういふ まも る べ
きには志すなき に は し ぞ す な
ほにして毎事ほ に し て まい じ
我をたてす夫われ を た て す かつと

の心に随ふべし「本文二十ノ五十一オ

それ天は陽に

して強く男の

ミち也地は陰に

して和ぐ女の

みちなり陰は

陽にしたがふ事「本文二十ノ五十一ウ

天地自然の道

理なるゆへ夫婦

のみち天地に

仮たれば夫を「本文五十二オ

天のことく敬ひ

尊ふは是則天

地の道なりされハ

幼より心栄へ

やさしく直なる「本文五十二ウ

故に交りかり

初にも猥がハしく

賤き友に近よ

るべからず水ハ

方円の器に「本文五十三オ

したがひ人は善

悪の友によると

いふ事実哉

爰を以てよく

家を治る女は「本文五十二ウ

正しき事を

好むよし申伝る

なり人の善悪

を知りたまふべ

きハ其人の親む「本文五十四オ

輩を見て伺ひ

知るといふ事

あれは誠に恥き

ことなり家を乱

す女はかたまし「本文五十四ウ

く氣随なる事を

このむといへば朝

夕われと心を

かへり見てあし

きをさり善に「本文五十五オ

移りすゝむべし

五常の理をう

けて生れたりと

いへともあるひは
善人となり或は

悪人と替る事

皆いとけなきより

の習によるべし

男子には師を

とり身を脩る

道をならハし

むるも有といへ共

女として学ぶ

者希なり此故に

女の法ある事を

しらずかたましく

邪になりゆく事

実に口惜次第也

いく程なく他の

家に行夫に

したがひ舅姑に

仕ふる身なれば

父母の許に留

まるハ暫のうち

なれば孝行を

「本文五十七ウ

尽す事第一なり

面に白粉を飾

り髪貌を粧ふ

のミにてこゝろの

ゆかみを採んと

する人稀なり

心ざし直に貪る

事なくハ貧おと

ろへたりとも恥

ならず邪なれば

富と云とも智ある

人に疎まれぬべし

惣して我善悪を

知らんとおもハ、

夫の心おだやかならバ

我行善とおもふ

べしせハしく短

慮ならバわかこゝろ

正しからざるとし

るべし人をめし

仕ふ事日月の草

木国土を照し

「本文五十九ウ

玉ふごとく心を廻し

其人々に随て

召仕べき事也「本文六十オ」

女教訓百ヶ條

① 生れ落ると取揚て

其まゝやハラかなる絹を

用意し置てそれを

ゆびにまきて児の口中に

ふくみたるけがれをぬ

ぐひとるべし

② 胎毒といふはこれを「本文六十ウ」

おそく取ゆへにこゑにつ

れて内へいりやまひと

なるなり

③ 医にたづねて能く

胎毒をはかせ一兩日して

其のちに乳をハ用へし

④ 小児の内病もみへぬ

にくすりを用ゆへから

すさあれはかへつて

病を生ずるもの也「本文六十一オ」

⑤ 母の乳ハよくく

もみやハラげすいいだ

さしめて其後用へし

⑥ 温なる処より出

たるもの殊にひふう

すくして風ひきや

すし古き綿など

にて能く包おくべし「本文六十一ウ」

⑦ 臍の緒をたつも刃物

をハ忌べし齒断たるか

よし絹にてつゝみ

歯にてかミ切るべし

そのあとへ灸すゆへし

⑧ 其痕には熊の膽を「本文六十二オ」

ぬり紙の和らか成

につゝみ糸にてつよく

巻てうふ湯のしめり

通らぬやうニすべし

⑨ 第一産湯のとき

風ひかぬやうに用心

すべし井の水を静

にくミて用ゆべし「本文六十二ウ」

④産湯の後度々あらふ

事あし。四五日のうち

一返あらふべしとかく

風ひかぬやうにとり

まハしすべし

⑤母に乳すくなき

時はやく乳母を

おくべし小児のとき

乳すくなけれハ後に

やまひと成なり

⑥乳母を置に心根の

すなをなるやかましく

なきものをおくべし

さなき物ハ子の為ニあし、

⑦扱児に着する物は

綿服にしくハなし

富貴なるものとても

七才までハ絹物を

いむべし

⑧小児はねつ多き

ものなれは惣じて

新しき絹はわろし

父母の古き物を仕立

なをして着すべし

⑨振袖を着する事

風流のためにハあらず

小児ハねつさかんに

鬱しやすきゆへねつ

をもらさん為なり

⑩童風の子とて寒

きにもうす着せしめ

つめたき物をきすべ

からす朝夕我人の

着程にきせて置

べし

⑪三十二日めに産氏神

まふでする事なり

此時もはじめて出る

事なれば心を付もの

おどろき風雲に

あたらぬやうにすべし

⑫夫物を見て笑ふじ

ぶんにならハ高声を上ケ

愛にまかせて肩な

どへあげわらハする事
なかれ

⑨子ともハ惣てもの

おそれをするものなり

「本文六十五ウ

よくく何事も恐れぬ

やうにすべしそだてやう

にて驕風など、いふ

病付なり

⑩ちいさき時よりもず

いぶん下にすへ置或ハとり

だちをさせあゆミつけ

さすれば達者成もの也

「本文六十六オ

⑪てうあひのあまりいだ

きか、へ下にハおかぬやう二

そだてし子はまめやか

なるものすくなし

⑫扱食物をすゝむる事

先かゆの上ずみをすこし

づ、喰しむべしめし

つぶにてハ脾胃をそて

「本文六十六ウ

なふものなり

⑬外に遊バしむるとも

暑き所冷やかなるところ

いむべし又おそろしき

人形など持すへからす

⑭富貴栄耀の人なり

とも子どもハマづしき

風情にすいぶんかろく

「本文六十七オ

そたつべし是そく

さいのかんやうなり

⑮扱四五才にもならば

悪からぬ所におきて

手慰をさすべし身を

こなす時は氣血をめ

ぐらしてよし

⑯女子ハ七月にして齒を

「本文六十七ウ

生じ七才にして齒おひ

かハリ七、を重ね十四才

より月けい廻り四十九才

にてめぐり納る也

⑰此故に七才の時より

女工のつとめをなさし

むたとひ富貴栄耀

の身なりともうみつ

「本文六十八オ

むぎの勤常に心にうくべし

⑧凡天地の間鳥けだ

ものにてもそれくの

能有まして人たる

者其道ををつとめ

ずんハあるへからず

⑨それ人は先心もち

にうわにして人に

随ふをよしとすかり

そめにも我身をほしゑ

まゝにおこなふべからず

⑩第一いとけなきより

父母に仕へて随分大

切にすべし十五過れば

早く他の家に稼する

ものなれハ親の心に

逆ふへからず

⑪言葉寡きハ恥すくな

し物多くいへハくず出来

てよき中もあしく成る也

常にかハらぬやうに

たしなむべし

⑫何事も心を柔和に

して腹立べきことをも

むかしの貞女賢女の

双紙にても見る時は

をのづから気のみじ

かきもやむものなり

⑬幼なきより道ある

かなものを見るべし伊勢

物語のやうなる恋がたし

き事ハ見るへからず

⑭ありく時はあなたこ

なたと見まハすべからず

顔を中ぶんにして徳を

すへありくべしあふのき

又うつぶき過たるも見ぐるし

⑮座してハもぢくと

すべからず指をくわへ

たゝミをなでゑりなど

いろふハなを見ぐるし

⑯人のまへにてあせぬぐひ

つめをとりかミをすきなと

すへからず

④人の寝畳をふみ枕を

こへねたる近所へハ入べからず
用あらハしとやかに外より

たづぬべし

「百二オ」

⑤親類にても男たる人に

むかひ密にさゝやくべからず

文のとりかハしなどすべからず

⑥文を能し詩哥をつらね

る程の力ありともしらぬ

ていにもてなしかしこだて

すべからず世の人にしらるゝ

ハ女の道にあらず

「本文百二ウ」

⑦女ハ十五六才になれハ人の

家に行物なれバおさなき

よりよミかきよろづの

げいをもはやくならひせ

けんの義理をよくあきら

むる事かんようなり

⑧女は内をおさむもの

なれはぬひはりうミ

「本文百二オ」

つむぎハいふに及バす

飯をかしきりやうりを

する事までもくハし

くしらずしてハなり

がたし

⑨諸事をよくおぼへて

人にまかせおこなふは

よくしらずして人に

「本文百三ウ」

任せ置ハ富にたかぶる

愚女なるべし

⑩情ハ人のためならずと

いふは慈悲善根にして

正直をもとゝし親類他

人にも情をあつくし

まじハリ結ぶを真の

情とハいふなり

「本文百四オ」

⑪今の世の人情といふは

恋の事に思ひてなまじい

伊勢物語など見て不義

する者多し大きなち

がひなり

⑫あしき事ありとて

かほにもみぢをちらし

給ハんハいとはしたなし

「本文百四ウ」

したくハおろかなるものとわき

まへたまへばいかりなし

⑤はしたなきせハしき人にハ

そひにくき物也いふべき

事ハいふて跡には心を

のこさすよくそだてゝめ

しつかふべし

⑥朋輩つきあひむつ

ましきこそ外より見

てもよけれわれより

まされるをねたミおと

れるあさけることなかれ

⑦嫁入前にもなるならバ

衣食たちふるまひまでも

しとやかに何事も物しづか

ばしなる事をいはずなをく

親たちへかうくし玉ふべし

⑧人を見まほしくすたれ

に顔さし付などし人を

見るほとハ人も見るなり

必見たく共しづかにすへし

⑨耳と目はうれへを

なし舌とくちとハわざ

ハひをなすといへりかなら

す大こゑなと上ケミたりに

人をそしるべからず

⑩女は何事も男の好む

事をすこしハ覚ゆべし

雨中などのつれく

なるにはすこしあい手

になればあいらしきもの也

⑪内の道具をハよくく

見さだめおきて扱取く

あらためてきれいにいたし

おくべし

⑫その身は早く起て手

水うがひし髪などもけづり

身をずいぶんきれぬにもつ

べし

⑬何ほときりやうよき者

にても身持あしきものは

とけてハ男のあいそつくるもの也

⑭人にあひ敬をあしらふ

時は右のひぎを上にふせかけ

左のかたの身の真中に

おきあいさつすべし

⑤常にもかくのごとく

にゐたまふべし我より

下さまなる人にあいさつハ

左の手をひぎのうへに置へし

⑥手のつきやう男のごとく

つくべからず指先をあとへ

なし手のはらをむかふより

見るやうに付玉ふへし

⑦女は髪のためだからん

こそ目だつへけれ朝夕

心がけてしなやかになるべし

髪形といへばねミだれかみ

など夫は見すべからず

⑧髪油はくるミのあぶら

よし油しなくあれとも

よろしからず匂ひあし

きあぶらなど付たる女は

いやしきもの也

⑨髪ゆひやう八品とあれ共

とかく時のはやりのとをり

是そよきとおもふのをよく

見ならふてゆふべし

⑩祝言の時はよめハ主居

とてかつ手の方に座すべし

つぼねハよめの座より右へ

少しさし出てさかづき

其ほかのとりさバきすべし

⑪式三こんの三ぼうよめと

聳とにすわるへし女蝶の

瓶子の酒を銚子に入男蝶

の瓶子の酒をひさげニ入べし

⑫男蝶をハうつむけて置べし

女蝶をバあをのけておくべし

さて式三こんに加へて三こん宛

のむなり

⑬初こんハよめ二度目の盃ハ

むこより吞はじむるなり

三こんめハ又よめよりのミはじ

むいづれも三こんくわゆるゆへ

三々九度の盃とハいふなり

⑭てうしひさげハ末座に

ひかゆべし此次に雑煮出る

是ハ待女郎つぼねにもするべ

し此時たかひに盃をとり

かハすなり聳ハその座に

居ベからす

⑤聳の家に行待女郎いざ

なひて化粧の間へ入宿にて

しばらく休息ありその内

こゝろへて湯づけにても

まいらすべし座敷にて

盃の時は食事参らぬ者也

⑥是より下つかたは

錫一对の口に女蝶男蝶

を付松と橘を付引わたし

の三ばうに小がく三枚こんぶ

かちぐりのしはしまふもあり

⑦提持やうつるの中ほどを

右の手にて持左の手を

右の手の下へかさね又大

指と人さしゆびとたけ高

指にて提のふちと外とを

もつなり

⑧銚子の左の方へかへらハ提

は左へかへる銚子左へかへら

ハ提ハ左へかへるべし本

酌ハむすぶともくハへハ本の

ことくとハ此事也

⑨ねやの盃と云ハつぼねニ

ても銚子持出てすこし

のミてむこに酒をすゝむべし

此時は聳よりよめにさし

夫よりだんぐにのミつぼねハ

おかしき事など云て口へ出べし

⑩むこより先へ寝玉ふ

べし聳用にても立たまふ

跡めてこしもと取つくるひ

てねせしむべし聳酒など

に酔玉ハ、あとにねても

くるしからず

⑪女はいとけなきより老に

至る迄人にしたがふもの

なれはよくく夫にしたがひ

つかふべし

⑫舅しうとめの跡をつぐ

物なれば我おやハなきものと

思ひ姑しよめを誠まことの親おやと大切たいせつに

おもふべし

⑤たとひ姑しよめあしき事を

の給たまふとも無理むり成なること、

「本文百十二ウ

おもはず我わがかよきと思おもふ

事ことをも打うちすて、したかふべし

⑥世よの諺ことわざによめとしよう

とめの中なかよきハもつけの内

といふぞわれさへまことの

みちにてつかへばなんぞ

しうとめの悪事あくじハ有あるまじき也

⑦女むすめはひかめるものなれハ夫おとこを

「本文百十三ウ

のミ大切たいせつにしてわれを

よそにおもふとひがめる

よりそしる也かまへて

姑しよめの前まへにてむつまじくす

べからず

⑧おもてむきを夫おとこにハそへ

んのやうにもてなし姑しよめに

だに孝行かうぎょうなればさてく

「本文百十四ウ

孝行かうぎょうなるよめと何事なにことも

嫁よめのよきやうに云いひなし玉たまふもの也

⑨膳ぜんをすゆる時貴人主人とききじんしゆじん

などすへ玉たまふをハ両りやうの手てを

出いし中ちゆうにて取とべし又

おとなしき人のすゆるには

左ひだりの手てをつきて礼有れいあるべし

⑩飯いひを喰く時は右みぎの手てにて

「本文百十四ウ

ふたをとりさて箸はしと飯めし

わんを右みぎにとりひだりへ

うつしくふべし

⑪何なににても右みぎより取とり左ひだりへ

うつし又また下したにおくときは

左ひだりより右みぎへうつししておく

べしさいよりさいへわた

るべからすいくたびも飯めしに

「本文百十五ウ

かへるべし

⑫汁じゆは始はじめハしる計はかりすふべし

二三度目にさんどめより身みをくふて

其後そののちハ何なににても左ひだりよりすぐ

に下したにおくべし

⑬さいハ膳ぜんに付つたるよりくふ

べし箸はしはまん中なかよりすこし

上かみを持もつべし永ながくみじ

「百十五ウ

かくもつハリよくわいなり

⑤めんるいハ口おとたかく

聞ゆるやうにくふべからず

そバきりに汁をかけて

くふは下ぎまのわぎなり

女中ハすまじき事也

⑥吸物ハ初こんには汁を

すひ後にミをくふべし

「本文百十六オ

二こんめハミをくひてのち

汁をすふべし大ていこゝろ

やすき所にてもかゆべからず

⑦まんぢうハ両の手にて

あんのこぼれぬやうにをし

わり二つにわけて右の方を

下に置左の方よりくふべし

⑧餅の類菓子かうのもの

「本文百十六ウ

にても丸き物ハくちに

くひたる齒をはなさす三ヶ

月のなりにならぬやうに

くふべし

⑨さかづきハ右の手に取

左の手にだいをとりて

中にてとりわけ臺は

下におきそといたじき

「本文百十七オ

さけをうけさしうつ

むきのむべし

⑩真瓜ふりハたてに四つ

わりにしてやうじそへ

皿に入れ出るなりやう

しとりあけふりの

なかごとをおとしてやう

じにさしてくふべし

「本文百十七ウ

⑪粽ハ葉末の方を右に

なし葉のもとをうへに

なし左に持て右にて

巻めをほときくふへし

⑫うす茶ハ左の手のうへ

にちやわんをすへ右の手を

そとそへてのむなり

⑬濃茶ハ上客の次の人

「本文百十八オ

に一礼し二口三口のミテ

茶の色を見て次第に

次へわたすべしすへの人

のミしまひて上客へもどす也

⑤ 上座請取て跡を見て

いきを聞て次第にわたす

末座請とりてあとを見

て又上座へかへし上座

「本文百十八ウ

うけとりすりよりて

いたじき茶わんをはじめ

出する所におく也

⑥ てい主出て茶碗をとり

なをす時かたじけなしと

たがひに一礼をするなり

物やハらかにしんべうにすべし

⑦ はう飯ハめしのうへに

「本文百十九オ

いろくのさいをおきて出

るなりはじめより汁を

かけてくふべしさいしん

より汁わんにうけて置べし

⑧ 膳ハ客の左のひざの方へ

すぢかハせひざへさハラぬ

やうにとをのかぬやうにすゆ

べしはじめすへたる所

「本文百十九ウ

より四五ぶも両手にて

おしこみたつへし

⑨ 食ハ盆にてかゆべからず

客の出し玉ふ碗のいとそこを

左の手にてしつかりとつま

み右の手にてもりすぐ

に出すべし

⑩ 汁ハ盆にてかへ勝手

「本文百二十オ

にて外のふたをして持

まいり其ふた取て盆のわ

きに置いてさし出すべし

⑪ 冷汁ハ提にはしを入つる

に持そへてつぐ也はしハ

つまりたる時の用意と

心得べし少かき立べし

⑫ 貴人え小刀にてもまいら

「本文百二十ウ

するハ刃を我方にむけて

つかのはしを持我手より

上を取玉ふやうにまいらすべし

⑬ 此外に習ふべき事ハ

書物 立花 たち物 琴

三味線 双六 此類少しづつ

覚てよし

凡右之條を能あきらめ

「本文百二十一オ

貞節ていせつの心こころを持もちて一生いっしょうを
おくる時ときハ身みおほる迄まで女義によぎ

の恥はづかしめなかるべき者もの也

朝夕あさゆふ是これを心こころにおもひ口くちに

いひいとけなきにおしへて

孝義こうぎをまなバしむる

事ことかんやうなり

女百ヶ条終

「本文百廿二ウ